

アメリカ科学文芸アカデミー編，日本生産性本部訳
『西暦2000年の世界と人類』（I，II）
日本生産性本部，1967年，B6：206+196 pp.

American Academy of Arts and Sciences (ed.),
Toward the Year Two Thousand:
Work in Progress, 1967.

本書は“2000年に向って限りなき前進への作業”ということでアメリカ科学文芸アカデミーが設置した西暦2000年委員会の手でまとめられたもので、1965年10月、1966年2月の2回にわたるシンポジウムを編集したものであるが、幸い本書は日本生産性本部の翻訳がある。本書に収録された論集は20編以上になるが、この中人口資質に関係ありと思われるもの、および日本に関係ある興味深い論述を中心として以下簡単に紹介し更に論評を加えたいと思う。ただ全体を通じて印象付けられる点は技術発展中心にものを述べていることで、それに従属した形での社会—経済—政治への予測ということが言える。この中で、ハドソン研究所長のハーマン・カーンの予測で注意すべき発言は世界の民族主義的傾向が国家主義よりも強く高まると見ている点である。ということは恐らく現世界体制を支配する民族を考えるとやはりアングロサクソン民族とスラブ民族が考えられ、しかもイデオロギー的な理解の下に国は別れていても団結する可能性があるからである。また彼の予測の技術革新の中人口資質的なものは遺伝コードに関するもの、特に性転換の能力の改善があげられよう。と同時に致死毒物の発達がある。しかしカーンは遺伝転換の中での突然変異という技術革新の刺激が逆にもたらす要因については何等触れておらない。ただ彼の予測の中で日本が著しく進展した脱工業化社会になることを予言している点が注目される。次に取りあげたいのはハーバード大学のアーンスト・マイヤーの生物学からの発言で、彼は積極的優生学を主張する。というのも現状の予想される人口資質分布曲線の先端に立つものは常に人間としての最高能力を開発し進展するが、全体の変異性曲線の間値の変動によってはこの極在部分は常に抹殺される可能性が強いことを考慮しなければならないことが言えるからだとしている。従って人類はこれらの自然的傾向に対し放任主義をとるかどうかがということが問題であるとする。

またエール大学のマーチン、シュビクの情報革命や、シカゴ大学のハリー・カーブンのによるプライバシー問題などからの予測発言では果して人権とか人道とかということが成立し得る社会になるかどうか問題であろう。例えばマサチューセッツ大学のガードナー・クオートンの医学が変える人間の行動、性格についてもホルモン投与、LSD、脳電極、モニターの発達、また技術進展が示す高性能微小通信機械など、いずれも個人の行動や秘密を変えさせたり暴露したりすることの出来る代物である。極端な事例を言えば歯の中に入るような通信器があったとしたらどうであろうか……盗聴技術の発展もその例に洩れまい。次にコロンビア大学のマーガレット・ミードの言う男女の役割の変貌が予測され、またハーバード大学のジョージ・A・ミラーの心理学から見た教育制度、学校教育内容、方法の変貌が予測されている。この外、明日への都市開発、新しい政治理念の確立など多彩な未来予測論で示されているが、マサチューセッツ工科大学のイーシル、デソラ、プールは20世紀後半の世界体制の中で、今後50年は核戦争は起らないであろうとしている点が注目されたが、この中でジョンソン大統領が1968年に再選されるだろうという予言はまさに外れているのである。従ってこうした政治問題になると彼の言う毛沢東やドゴールが1970年までに死去するだろうという見解も怪しくなってくるかも知れない。

従って科学技術の分野ではかなりの見通しがつくが、他は臆測の範囲を出まい。こうした予測学というものが出来るとすれば学問、勉強も面白くなってこよう。だが真実の程は保証の限りではない。

(篠崎 信男)